

6/30 2012



Japan Music Education Society **News Letter**

第48号

No. 48

日本音楽教育学会ニュースレター

目次

ご挨拶	2
1 日本音楽教育学会第 43 回大会（東京大会）のお知らせ	
1-1 第 43 回大会について.....	3
1-2 院生フォーラム発表者募集について.....	4
2 会員の声	
2-1 福島的心を受けとめるハンガリーの暖かき心.....	5
2-2 新刊紹介 音楽教育哲学（オックスフォード・ハンドブック）..	6
2-3 新刊紹介 ピアノレシピ フルコース.....	7
2-4 私はなぜ『バイエルの謎—日本文化になったピアノ教則本』を 書いたのか.....	8
2-5 日本赤ちゃん学会 第 12 回学術集会に参加して.....	9
2-6 全日本音楽教育研究会のお知らせ.....	11
3 報告・ご案内	
3-1 平成 24 年度第 1 回常任理事会報告.....	12
3-2 平成 24 年度第 1 回理事会報告.....	13
3-3 平成 24 年度 役員及び委員一覧.....	16
3-4 編集委員会からご挨拶と報告.....	17
3-5 国際交流委員会からご案内.....	18
3-6 常任理事会企画からのお願い.....	18
4 事務局からのお知らせ.....	19
編集後記	

ご挨拶

日本音楽教育学会会長：加藤 富美子

会長2期目に入りました。前期の成果と課題をふまえつつ、本学会のさらなる発展をめざして運営にあたっていきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

前期の冒頭で、次の2点を目標として掲げました。第1は「みんなでつくる学会」にすること、第2は「研究と実践をつなげる学会」にすることです。そして、その具体的な方法として、次のような例をあげました。

- ・ 学会誌『音楽教育学』の論文掲載数を増やす
- ・ ニュースレターならびにHPの内容を充実する
- ・ 学会主催のワークショップを地区で開催する
- ・ 研究ならびに運営の両面にわたって、若い力をより生かす

「みんなでつくる学会」にふさわしく、このいずれについても、幅広い会員のお力により実現することができたことを大変嬉しく思っています。学会誌『音楽教育学』は編集委員会の大変なご尽力により、論文掲載数が大幅に増えました。新しく設けた広報委員会のもと、ニュースレターならびにHPの内容の充実がはかられました。また、2010年8月には、北海道地区により「江差追分ワークショップ」が開かれ、学会主催のワークショップと地区例会が一体となった新たな試みとなりました。そして、新しく参事制度を設けたことなどを通して、若い世代のフレッシュで多彩な力が学会の運営に加わるようになりました。とくに東日本大震災の教育支援として2011年6月に立ち上げた「音楽教育支援ポータルサイト」は、企画・運営のすべてを若手の運営メンバーが行っており、日々さまざまな難題に立ち向かいながら学会と社会の架け橋の役割を担っています。また、2011年8月に開催された神田ゼミナールでも、若い会員が運営に大きな力を発揮し、その後も研究会として継続がはかられています。

埼玉、奈良で開かれた年次大会での口頭発表数は、上向きの一途をたどり、100を超えるのが当たり前になってきました。それぞれの大会実行委員会の渾身の準備のおかげで、年次大会もますます充実してきています。このほか、事務局のIT化の促進、名簿発行などが、事務局長のリーダーシップのもとに行われ、会員同士のネットワークがとりやすくなりました。まさしく「みんなでつくる学会」になってきていると言えるでしょう。

ただ、第2の目標として掲げた「研究と実践をつなげる学会」にすることについては、未だ大きな成果をあげるには至りませんでした。今期はその反省のもと、次のことを目標にしていきます。

第1は「社会に発信する学会」にすることです。そして第2は「社会に役立つ学会」にすることです。研究が実践に生かされ、実践が研究に生かされるためには、本学会におけるさまざまな研究成果をより広く知ってもらうために発信していくことが欠かせません。研究成果を読みやすく手にとりやすい形で公刊することなどを含め、社会への発信のしかたを検討し実行に移していきます。そのことはまた、「社会に役立つ学会」につながることでしょう。さまざまな研究分野にまたがる1,500名の会員の音楽教育研究が、学会のもとでまとまり社会に役立つ力となったら、どんなにか素晴らしいことでしょう。

「社会に発信する学会」「社会に役立つ学会」をめざして歩んでいきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

1 日本音楽教育学会第 43 回大会（東京大会）のお知らせ

1-1 第 43 回大会について

大会実行委員会委員長：下道 郁子
同 事務局長：福田 裕美

平成 24(2012)年の大会は、東京音楽大学で開催する運びとなりました。東京音楽大学は現存する私立の音楽大学で最古の歴史を持っております。今回の大会では、実技教育を中心とした音楽大学ならではの実践的な内容の企画を盛り込みながら、「音楽教育と文化の 100 年」を振り返り、音楽教育の未来に思いをめぐらせる大会にできたらと考えております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

1. 会場：東京音楽大学（〒171-8540 豊島区南池袋）

2. 日程：平成 24（2012）年 10 月 7 日（日）及び 10 月 8 日（月・祝）

（仮スケジュール）

10月 7日 (日)	8:45 9:30 12:30	13:30 15:00 15:15 17:45 18:00 19:00
	受付 研究発表 I	* 昼食 P 研・共同企画 基調講演+シンポジウム 総会 懇親会
10月 8日 (月) 祝	8:30 9:00 12:30	13:30 15:00 15:15 16:45
	受付 研究発表 II ピアノ公開レッスン	昼食 P 研・共同企画 共同企画 吹奏楽ワークショップ ガムランワークショップ（入替え制）

* = 院生フォーラム

なお、8 日（月）は祝日ですが、東京音大では授業を行っています。構内に学生がおり、皆様にご不便等おかけすることもあるかもしれませんが、何とぞご理解のほど、よろしくお願い致します。

3. 参加費：

会員 4000 円（事前振込）・4500 円（当日払い）

非会員 1 日のみ参加→3000 円／両日とも参加→5000 円（当日受付にお申出ください）

学生会員 1 日のみ参加→2000 円／両日とも参加→2500 円（当日払いも可）

4. プログラム：

＜基調講演・シンポジウム＞

「音楽教育と音楽文化の 100 年、そしてこれから」

基調講演講師：渡辺裕（美学芸術学及び文化資源学，東京大学）

シンポジスト：渡辺裕

佐野靖（音楽教育，東京藝術大学）

周東美材（音楽社会学，東京音楽大学非常勤講師）

司会：下道郁子（東京音楽大学）

＜ピアノ公開レッスン＞ 講師：岡田敦子（ピアノ，東京音楽大学）

＜吹奏楽ワークショップ＞ 講師：津堅直弘（トランペット，東京音楽大学）

＜ガムランワークショップ＞ 東京音楽大学付属民族音楽研究所

この他、共同研究、研究発表、院生フォーラム等多数

5. 大会実行委員会メンバー：

下道郁子（大会実行委員長）、本多佐保美（大会実行副委員長）、福田裕美（事務局長）、赤羽美希（会計）、小原伸一、山下薫子、中村千鶴、水谷早紀、青山優里子、北村愛

6. 会場へのアクセス：

J R「池袋駅」東口、私鉄各線（西武池袋線・東武東上線）「池袋駅」、地下鉄各線（丸ノ内線、有楽町線）「池袋駅」より徒歩約 15 分

地下鉄副都心線「雑司ヶ谷駅」1 番出口、都電荒川線「鬼子母神前」より徒歩 5 分

7. 詳細及び最新情報：

<http://www.tokyo-ondai-musiceducation.jp/43ongakukyoikugakai/index.html>

1-2 院生フォーラム発表者募集について

東京音楽大学大学院 野田 かおる
(大会実行委員会 中村千鶴)

修士課程・博士課程の院生による「院生フォーラム」発表者募集！

日本音楽教育学会第 43 回大会(東京大会)では、全国の大学院生によるポスターセッションを下記の通り開催致します。「院生フォーラム」は大学院生が企画・実施しており、今年度は東京音楽大学の院生を中心に運営いたします。

発表者はポスターを展示し、発表者と参加者間での活発な意見交換が行われています。教科教育に限らず、音楽文化政策・音楽文化史・実技教育・生涯教育・音楽療法など、様々な分野からの発表をお待ちしております。

1) 期 日：10 月 7 日(日)11:30～13:30

2) 展示場所：東京音楽大学 A200 教室前

3) 発表資格：申込時点で学会入会手続きを完了、会費を納入した大学院修士課程あるいは博士前期課程・後期課程に在籍する学生

*入会については学会事務局にお問い合わせ下さい

4) 発表形式：ポスター展示、テーマ・研究計画・概要等の質疑応答

5) 申込方法：以下の項目を記載してメールでご送付下さい

・件名：「院生フォーラム申込(氏名)」

・本文：氏名、所属大学、テーマ

申込・問合せ先 ☞ tcmo.meforum@gmail.com 野田かおる

6) 申込締め切り：9 月 8 日(金)

今回開催スペースが限られている為、定員になり次第募集を締め切らせて頂きます。

早めのご応募をお願い致します。

参加者には、院生フォーラム設営等のお手伝いをお願いする場合がございますので、ご承知おき下さい。

2 会員の声

2-1 福島の心を受けとめるハンガリーの暖かき心～福島コダーイ合唱団4回目のハンガリー演奏旅行～

帝京平成大学 降矢 美彌子

福島コダーイ合唱団は、2012年3月、ドナウの真珠と称されるハンガリーの首都ブタペストで4度目の演奏旅行を行いました。福島コダーイ合唱団は教員合唱団で、今年創立25周年を迎えます。3.11震災以来、様々な被災者支援の活動を続けてきましたが、地震、津波、原子力発電所の事故で辛い思いをしてきた福島の今を音楽家として伝えたいと、合唱の国ハンガリーのパトロナ・フンガリエ高校（3月25日）、コダーイ記念博物館（3月26日）、バルトク記念館（3月27日）での演奏会を企画したのです。パトロナ・フンガリエ高校は一流の演奏家を招いて音楽史の授業や演奏会を行うことを年間のカリキュラムに取り入れているカソリックの学校です。

二つの博物館は、20世紀を代表する作曲家コダーイ・ゾルターンとバルトク・ベラの住居であったところで、二人は協同してハンガリーの民謡収集・研究の仕事に取り組みました。博物館には、音楽の仕事に加え二人が収集した美しい民芸品、木彫、陶芸、刺繍などが展示されていて、一部がホールになっています。コダーイとバルトクは、民謡だけでなく農民の民芸を大変尊敬していたことが、展示を見るとよくわかります。20世紀を代表する二人の作曲家のコダーイ博物館、バルトク記念館のホールでの連続演奏会は大変珍しいことです。



↑ コダーイの最新書とコダーイ夫人（写真右）

コダーイ博物館では、コダーイ夫人がお迎えくださって、コダーイの収集した民芸品の数々や書籍、文房具、博士論文など手にとって説明してくださり、まるでそこにコダーイがいるような暖かい感慨に溢れて歌うことができました。コダーイ博物館のコンサートは、ハンガリー・コダーイ協会の主催でコダーイ生誕130年、没後45周年記念の演奏会として行われました。演奏会の開始にあたり、会長で日本の文化勲章にあたるコシュート賞受賞者のセーニ・エルジューベト女史から、福島コダーイ合唱団と震災後の福島について心を込めた紹介がありました。



↑ クルターグ「ことばとは何」バルトク記念館にて

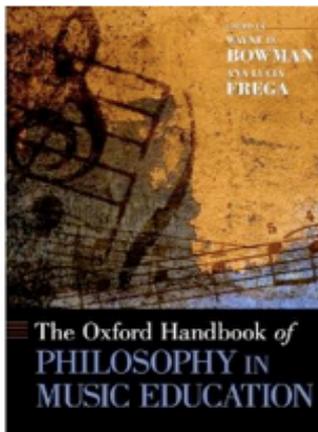
バルトク記念館では、バルトクの写真に囲まれて20世紀最高の傑作と言われる「児童と女声のための合唱曲集」27曲全曲とハンガリーを代表する作曲家クルターグ・ジェルジュ（1926-）の傑作、サミュエル・ベケットの遺稿による「ことばとは何」（Op.30/a）、日本の民俗音楽を演奏しました。作品は朗誦と弱音器を用いたアップライト・ピアノで演奏されます。今回は、朗誦を合唱による初演で、ハンガリーの演奏会評でも大きく取り上げられました。クルターグご夫妻が9回もレッスンして下さって、聴衆に福島の思いを深

い感動とともに受け取っていただけたことは嬉しいことでした。ハンガリーの合唱団は、福島コダーイ合唱団からハンガリーの魂を学ばなければならないと言っていたことは最高の賛辞と言えましょう。

最後に祈りとともに歌ったいわきの「じゃんがら念仏踊り」や宮崎県の「刈り干し切り唄」は、涙してお聴きくださいました。自国のよいレパートリーをもつ大切さを実感したことです。世界は、さまざまに危機に瀕していますが、歌を通してこのように繋がりあい手を取り合っていくのなら、きっと世界を平和にできるだろうと思えた3日間でした。美しい福島をともに取り戻したいと帰路に着いたのです。コシュート・ラジオ、テレビなど多くの取材がありました。

2-2 新刊紹介 音楽教育哲学（オックスフォード・ハンドブック）

弘前大学 今田匡彦



Wayne Bowman , Ana Lucia Frega (編集)
The Oxford Handbook of Philosophy in Music Education
(Oxford University Press)
全 496 頁
12,438 円, 2012 年 5 月刊行

ISBN-10: 0195394739
ISBN-13: 978-0195394733

音楽教育とは、常に哲学を内包する営みであった。音楽を創る、音楽を演奏する、音楽を聴く、音楽を考える、音楽を売る…といった〈音楽〉という現象をめぐるさまざまな立ちあい方を相対化し、人に伝えつつ実践する〈音楽教育〉は、音楽とはなにか、或いは、なにが音楽か、といった哲学命題に応じるための最も有力な活動であるからだ。哲学を細分化することにより成立してきたさまざまな学問、言語学、社会学、心理学、人類学、歴史学或いは美学などが、その細分化の過程で方法論の名の下に切り捨ててきた多くの変数を、音楽教育はあつけらかんと拾い集める。細分化により疲弊した哲学は、音楽教育という新たな対象により、リニューアルする。

(1) The Nature and Value of Philosophical Inquiry (2) The Nature of Values of Music (3) The Aims of Education という3つのパートから成る本書は、このような哲学の新たな視座を、学校教育を基盤とした音楽教育を超越しつつ探究するとともに、従来の音楽教育制度、政策、及び慣習についても分析する。これら音楽教育をめぐる諸問題を、難解な哲学議論に陥ることなく、日常性に根差しつつ展開している点が、本書の特徴の一つである。また、各章を世界6大陸から集められた音楽教育学者たちが担当しているため、従来の欧米中心主義的な音楽教育哲学からも一歩脱却している点が、本書のもう一つの特徴でもあり、オックスフォード大学出版局ならではの企画と言える。

編集にあたった2名以外の執筆者は以下の通りである。

V.A. Howard (Harvard University)
Yuh-Wen Wang (National Taiwan University)
Thomas Regelski (SUNY Fredonia)
Harold Fiske (University of Western Ontario)
Keith Swanwick (University of London)
Robert Walker (University of New South Wales)
Sandra Stauffer (Arizona State University)
Charlene Morton (University of British Columbia)

David Elliott (New York University)
 Helen Phelan (Irish World Academy of Music and Dance)
 Lauri Vakeva (Sibelius Academy)
 Bennett Reimer (Northwestern University)
 今田匡彦(弘前大学)
 Diane Thram (International Library of African Music, Rhodes University)
 Luis Estrada (Universidad Nacional Autónoma de México)他

詳細は以下のサイトにて確認できます 
<http://ukcatalogue.oup.com/product/9780195394733.do>

2-3 新刊紹介 ピアノレシピ フルコース

「まるやかな名曲クラシック」「とろける名曲クラシック」

上越教育大学 後藤 丹

執筆した自分ながら「奇書」だと思います。一応はピアノ名曲集なのですが、それぞれの曲をさまざまな料理に見立て、練習番号に沿って調理法や味付けの仕方をレシピ風に解説するという趣向。しかも2冊それぞれが、前菜、スープ、魚料理、グラニテ、肉料理、チーズ、デザート、コーヒーのフルコース8品で構成されています。

たとえば、エルガーの《愛の挨拶》は前菜「マグロのカルパッチョ」。魚をスライスするところからスタート。やや陰りのあるホ短調の部分では、「ここでタマネギを薄切りにします。前もって良く包丁を研いでおかないと涙が出ることがあるので注意しましょう」といった調子。ドビュッシーの《月の光》では、音楽の展開に合わせて、サイフォンを使ってコーヒーをいれます。



PIR ELISE WAGNER
1827

PIANO RECIPES

おいしい
フルコース
〜とろける名曲クラシック〜

PIANO RECIPES
おいしい
フルコース
〜とろける名曲クラシック〜

料理と演奏は似ている!?

おいしい
高級のコツ
教えます

★
全8品
のフルコース
メニュー

ピアノシェフがあなたの演奏をお手伝い!
レシピ通りに弾くだけで、あっという間においしい1曲のできあがり!

viande

エリーゼのために

(原題) Für Elise Wo059 (作曲) Ludwig van Beethoven

シェフから一言
CHEF'S COMMENT

ソナタ、変奏曲など、比較的高カロリーのセットメニューを主とするベートーヴェン(1770~1827)のピアノ作品の中から、愛らしい単品料理を取り上げましょう。作曲家が39歳頃に作曲し、当時好意を寄せていたアレーゼ・マルファッチという18歳の女性にプレゼントした曲です。彼は楽譜に「アレーゼのために」と記しましたが、連筆(悪筆?)過ぎたためか、後の出版に際し、誤って「エリーゼ」と誤られてしまった、と現在考えられています。情熱的な愛の香りが漂う一品。もっともこの恋は成就しなかったのですが……

材料
INGREDIENTS

Poco moto (弱) …… 少し動きをもって(つまり、やや速めのテンポで)
 dolce (弱) …… 柔らかく
 rall. (弱) (rallentando) …… 次第に遅く(ritと同じ)
 morendo (弱) …… 命の絶えるように(すでに悲恋を暗示か!)

下ごしらえ
PREPARATIONS

次の2つの右手パッセージは、全曲中テクニック的にも最も難しい部分です。あらかじめ取り分け、良く水洗いしておきましょう。まずはAでゆっくりと弾き、慣れてきたら、少しずつテンポを上げ、弱音で均等な粒状に仕上げましょう(「作り方」の項も参照のこと)。

Exercise

A

B

文章だけ読むとばかばかしいかもしれませんが、かなり苦心して音楽と料理の手順がぴったりと合うように考えてあるので、弾きながら解説をたどると結構楽しめるはず。また、そのほかにも前書きの「基本の調味料」「基本の調理法」として、ピアノ演奏の「こつ」を語ろうと試みました。

「微笑みながらピアノに向かうことができ、同時に食欲と健康が増進するでしょう」と後書きで書いたように、「遊び心」のあるピアノ愛好家のために企画された本です。

曲目は《愛の夢》《ジムノペディ1番》《幻想即興曲》《亜麻色の髪の乙女》《パッヘルベルのカノン》《エリーゼのために》《亡き王女のためのパヴァーヌ》など2冊で16曲。

優秀なデザイナーと二人の女性編集者とが凝りに凝った仕上げを施し、見た目は楽譜というよりもほとんど料理本です。楽譜店でお手にとってご覧いただければ幸いです。

全音楽譜出版社 菊倍版 各 64 頁
定価 各 1500 円+税
2012 年 2 月

2-4 私はなぜ『バイエルの謎—日本文化になったピアノ教則本』を書いたのか

奈良教育大学 安田 寛



先日、「歴史的認知音楽学研究会」と名前は立派な小さな研究会で友人の中西光雄さんの近著『「蛍の光」と稲垣千穎—国民的唱歌と作詞者の数奇な運命—』を紹介した折、若い研究者はリスクを冒すことに躊躇している、と大言壮語してしまった。業績が必要な若い研究者は、重要な問題だけど、成果の見込みがたたない研究には手を出さないという意味である。私のバイエル研究は、そんなまったく見込みのない研究であった。

ところで、学術研究を研究論文として書くよりも、普通の人が楽しんで読めるものとして書くことを私は好んでいる。『唱歌と十字架』もそうだったけど今回の『バイエルの謎』もそうである。その目論見はうまくいったようで、「安田寛氏著『バイエルの謎』1 度目読了。2 度目のマインツ訪問からドキドキが止まりませんでした。」(@omaaatsu Jun 01, 9:19am), 「この本の群を抜いた面白さには、ただひたすらに引き込まれた。」

(音楽にまつわる覚え書き, <http://dsch1975.blog75.fc2.com/?no=548>), 「その結末は、壮大ともいえるくらいな感銘を与えます。」(OTTAVO Amoroso, http://blog.ottava.jp/ottava_amoroso_wk/) などツイッターやブログで、発売から 1, 2 週間で多くの反響が寄せられたことは著者として嬉しい限りであった。

改めて言うほどのことではないが、学術研究の意義は、人類の知識に新しいものを付け加えることである。新発見とか、これまで解かれていなかった問題の解答とか、これはしかしなかなか大変なので、言葉は悪いが、たいていの研究は「重箱の隅をつつく」ものとなるのは宿命のようなところがある。しかし、研究者が本当に知りたいと思っている学術的問題は、一般の人々の興味をひくものであり、それを解いて解答に到る過程は、新しいことを知りたいという知的欲求を刺激し、推理小説以上の面白さになる可能性を秘めたものでもあることがよくある。今回私が解こうとした問題ははずばり「バイエル」である。

CiNii Articles で「バイエル」「ピアノ」を検索すると 46 件あがってくる。これらを含めたバイエル研究の水準は残念なことに高くないというのが私の率直な評価である。主な理由は、3 つある。

1. バイエル批判を無批判に採用している。
2. バイエルはメーソンが持ってきた、と無批判に引用している。
3. 教則本の分析が見当はずれである。

論文でバイエル批判を展開するとき、必ず引用されるのが『日本人の音楽教育』(新潮選書)で述べられたロナルド・カヴァイエの批判である。バイエルを説明するとき、これまた必ず引用されるのが辞書『新訂 標準音楽辞典』(音楽之友社)にも書かれている「メーソンが持ってきた」という定説である。教則本を分析し、その特徴を明らかにしようとした論文も結構ある。調性、リズム、形式などを極めて詳細に分析しているものの、それによってバイエルの特徴が少しも明らかにされていない、と私は感じる。段階的進歩にそった教則本である、と昔からすり切れるほど言われているようなことをただただ繰り返しているに過ぎない。バイエルが教則本の歴史の中で、どのように位置づけられるのか、その位置が教則本に具体的にどのように反

映しているのかにまで切り込んだ論文は、小野亮祐氏の研究を除くと皆無であったと言っている。以上3点の学術的にも重要と思われる問題を私がどのように解いたのかについて知りたい方は、ぜひ、『バイエルの謎』を紐解いて欲しい。

この他にも、バイエルはいつ出版されたのか、初版は現存するのか、初版と現在普及しているペータース版とはどのように違っているのか、日本のバイエルの一番の特徴である「子どものためのバイエル」とは一体何なのかという疑問についても明らかにした。多田純一氏の研究を除くと、これまでの日本のバイエル研究が、今日まで流布している様々な版について比較検討をせずに書いていることは、改めて考えると日本のバイエル研究の特徴をよく表しているとも言える。そしてこれがもっとも重要であると言えるのが、これまで全く不明だったバイエルの人物像を明らかにした。

最後に言いたいのは『バイエルの謎』の洋楽受容史としての意味である。日本人は西洋音楽をどのように受容していったのか、日本人にとって西洋音楽とは何か、この問題にとっては、唱歌と並んで重要なのが、バイエルピアノ教則本とそれを書いたフェルディナンド・バイエルである。これが、私が『バイエルの謎』を書いたもっとも大きな学術的理由であった。本書は研究者のために書いた本ではないが、重要な出典はすべて明らかにして学術的目的のためにも利用できるよう便宜を図ったつもりである。よって、『バイエルの謎』によって、バイエル研究はようやく学術研究に耐えられる基礎を獲得した、と私自身は自負している。

音楽之友社 四六版 280頁
定価 2520円
2012年5月

2-5 日本赤ちゃん学会 第12回学術集会に参加して

共立女子大学 村上 康子

2012年6月2日から3日にかけて、玉川大学にて、日本赤ちゃん学会第12回学術集会が開催された。「赤ちゃん学」とは医療、工学、心理学、社会学、保育などの異分野研究の融合による新しい学問領域であり、学会自体は2001年に設立されている。この学会からは、学会誌『ベビーサイエンス』のほかに、赤ちゃん研究と育児や保育の現場をつなぐ雑誌『赤ちゃん学カフェ』が刊行されており、研究と保育・教育現場との架け橋となることも目指されている。学術集会参加者の顔ぶれを見てみても、先に挙げたような多様な領域の研究者に加え、保育実践者、乳幼児の教育実践者も多く参加しており、多様な視点からの活発な質疑応答が行われていた。

第12回学術集会はシンポジウム3件、ラウンドテーブル5件、ポスター発表65件と多数の発表があり、ポスター発表には坂井康子氏・岡林典子氏による「乳幼児音声のリズムの変化」など音楽関連の研究もみられ、研究者間の意見交換も活発に行われていた。

今回、筆者は「赤ちゃんと言楽—音楽が音声や身体との相互作用として果たすもの—」というラウンドテーブルに参加させていただいた。このラウンドテーブルは、赤ちゃん学会音楽部会の志村洋子氏が企画するものである。昨年の学術集会でも「赤ちゃんと言楽—保育の場と研究成果をつなぐもの—」というタイトルでラウンドテーブルが行われた。

今年のラウンドテーブルは「いかに『音楽（と思うもの）』を与えたり教えこむかを考える前に、赤ちゃんからの発信や養育者との相互作用の中で生起していることを多角的に検討し、そこから学ぶ必要があるのではないだろうか¹」という視点から構成されていた。

はじめに「赤ちゃんの音声発達における音楽的な要素」というタイトルで、乳幼児の母語音声システムの構築・獲得過程を研究している麦谷綾子氏（NTTコミュニケーション科学基礎研究所）から、乳児の言語獲得に関する最新の研究動向について発表があった。赤ちゃんは言語リズムを手がかりに言語を聞き分けるようになり自分の母語に注意を向けること、また、言語生成面では2歳までに母語の言語リズムの基礎を獲得すること、さらに、ゆっくりとした話速、

¹ 志村洋子ほか(2012)「赤ちゃんと言楽—音楽が音声や身体との相互作用として果たすもの」日本赤ちゃん学会第12回学術集会 プログラム・要旨集 p.28

抑揚豊かで明瞭という特徴を持つ対乳児音声は乳児の注意を引き付ける特徴をもち、言語獲得を促進する働きがあると考えられることなどが明らかにされた。

続いて、丸山慎氏（駒沢女子大学）より「赤ちゃんを包囲するモノと声：アフォーダンスから音と子どもの関わりを見る」というタイトルで、楽器を用いた母子遊びの縦断的な観察研究の成果が発表された。赤ちゃんがグロッケンという楽器を与えられると、たとえ、母親が一般的な奏法を示したとしても、赤ちゃんはその奏法で音を鳴らすまでに様々な試行錯誤を加えることが示された。つまり、赤ちゃんは、楽器という「音を出すモノ」を与えられたとしても、単に音に動機づけられるだけではなく、楽器というモノが持つ多様な特徴や構造に対する知覚と自身の身体的な探索を通して楽器の遊び方、鳴らし方を変化させていくことが明らかにされたといえる。

最後に、今川恭子氏より「赤ちゃんの“音楽性”をどう見るか」というタイトルで発表があり、赤ちゃんが発信している音声・音といったものの中に我々が「音楽的」と感じるようなものが含まれていることが映像とともに示された。さらに、近年、言語発達や運動発達の研究の中にも「音楽性」に言及するものがあり、それらは確かにリズムや音高の特徴に焦点を当ててはいるものの「音楽」の概念規定そのものに危うさがあること、さらに、音響的特徴にのみ依拠して音楽を定義するのは不可能であり、文化の中で行為によって支えられている営みであるということに自覚的でなければならないということが示された。

このラウンドテーブルは、言語学、発達心理学、音楽学・音楽教育学という領域の異なる研究者の発表から構成されていたわけだが、赤ちゃんの言語獲得過程、楽器奏法の認識の過程の研究成果には、子どもと音楽をするうえで知っておくべきこと、気をつけるべきことなど、多数の音楽教育にかかわる研究成果があった。例えば、子どもが驚くような奏法で楽器を鳴らしていた時に大人が如何に働きかけるべきか、丸山氏の発表は、大人が持っている楽器奏法の固定的な概念を一方向的に押し付けることの危険性を指摘していたと言えるだろう。音楽・音楽教育に関連する多様な領域の研究者とのコラボレーションによって得られる知見は数多くある。

その一方で、それぞれの研究者が用いる用語の中には、同一のタームでも概念が異なるものが多くみられた。例えば、音声言語研究では、アクセント・リズム・ピッチなど音楽用語としても用いられるようなタームが数多く使用されているのだが、音楽用語で用いられている定義・概念とは少々異なる部分がある。それぞれの領域で用いられているタームの概念を慎重に捉えつつ、他領域の研究を学んでいかなければならないことを痛感させられた。

また、討論の中では、研究で明らかになった内容を現場に還元しようとする、度が過ぎた形で実践されてしまうことが少なからずあるという報告があった。ラウンドテーブルの指定討論者で赤ちゃん学会理事長の小西行郎氏によって「研究と教育との関係の取り方について慎重に考えて行かなければならない」ということが厳しく指摘され、フロアで共有されたことも見逃せない。

音楽教育という学際的な学問領域の中で、学習者にとって真に有益な研究成果を出すためには、多領域の研究成果を踏まえつつ、教育実践と往復させながら研究を進めて行くことが求められる。今回参加したラウンドテーブルも、異分野の研究者、そして教育・保育の実践者とのエキサイティングなディスカッションから、その面白さと必要性とを実感させられるひと時となった。

企画者の志村洋子氏より、次回の学術集会でもラウンドテーブル「赤ちゃんと音楽」の開催を予定していることが伝えられた。新たに進められる研究の成果報告と、活発な討論とが非常に楽しみである。

2-6 全日本音楽教育研究会のお知らせ

信州大学 齊藤 忠彦

全日本音楽教育研究会（全日音研）全国大会長野大会を以下のように開催します。「学生参加費(3,000円)」を設けましたので、学生の皆さんへのお声掛けをお願い致します。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



2012「秋」NAGANOへお越しください！
全日音研全国大会長野大会(小・中学校部会大会)

期日: 平成24年11月15日(木)・16日(金)
会場: ホクト文化ホールほか(長野県民文化会館) 長野市若里1-1-3
主題: 「高めよう！音楽の確かな力。味わおう！音楽の美しさ。分かち合おう！音楽の喜び。」

15 日 午前	公開保育・公開授業
	<p>公開保育を1つ。会場は信学会昭和幼稚園。助言者は今川恭子氏（聖心女子大）。</p> <p>小学校公開授業を6つ。会場は長野市立芹田小学校ほか。題材は「雅楽の響きを楽しもう」「リズムアンサンブルをつくろう」「旋律の重なり合いを感じて歌おう」ほか。助言者は、伊野義博氏（新潟大）、中山裕一郎氏（信州大）、内山澄孝氏（前国立音大）ほか。</p> <p>中学校公開授業を6つ。会場はホクト文化ホールほか。題材は「箏の二重奏曲をつくろう」「木琴連弾」「日韓合同授業」ほか。助言者は宮下俊也氏（奈良教育大）、齊藤忠彦氏（信州大）ほか。</p>
15 日 午後	ワークショップ&パネルディスカッション（小・中合同）
	<p>ワークショップを4つ。「歌唱」を富澤裕氏（作曲家、指揮者）、「音楽づくり・創作」を後藤洋氏（作曲家）、「音楽鑑賞」を宮下俊也氏（奈良教育大）、「日本音楽」を伊野義博氏（新潟大）。</p> <p>パネルディスカッションを1つ。テーマは「音楽科が歩んできた道 歩んでいく道」。パネラーは今川恭子氏（聖心女子大）、丸山忠璋氏（武蔵野音大）、藤沢章彦氏（前国立音大）ほか。</p>
16 日 午前	全体講評（小・中合同）
	<p>全体講評は、全体指導者の大熊信彦氏・津田正之氏（文科省）</p>
	記念演奏（小・中合同）
	<p>幼児の演奏（信学会長野北幼稚園）、リコーダーサンサン（岡谷市立湊小）、オペレッタ（長野市立朝陽小）、音楽の根源に迫る（長野ろう学校）、合唱で一つになる（栄村立栄中）、みんなでプラス（上田市立西内小）、引き継がれる歌声（附属長野中）、吹奏楽（長野市立裾花中吹奏楽部）</p>

- ・一般の方の参加費は2日間で6,000円です。**学生参加費（院生を含む）は3,000円です。**
- ・参加申し込みにつきましては、7月下旬に2次案内を掲載します。詳しくは「**全日音研長野大会HP**」をご覧ください。<http://music.shinshu-u.ac.jp/nagano2012/>
- ・参加者には、『信州ふるさとの愛唱歌』（長野大会記念出版）を差し上げます。
- ・お問い合わせは事務局までお願いします。

<全日音研長野大会事務局>

信州大学教育学部音楽教育コース内「全日音研長野大会事務局」齊藤忠彦
 TEL&FAX：026-238-4133 E-mail：saitota@shinshu-u.ac.jp

3 報告・ご案内

3-1 平成 24 年度第 1 回常任理事会報告

日 時：平成 24 年 5 月 13 日（日）13：00～14：30

場 所：立教大学 12 号館第一会議室

出席者：加藤，有本，今川，伊野，今田，小川，奥，北山，島崎，寺田，水戸（記録）

加藤会長の挨拶に続き、今川事務局長から前年度第 3 回理事会以降の会務報告がおこなわれた。あわせて、理事会と重複する審議事項は理事会に回すことが確認された。

会務報告 <平成 24 年 2 月 19 日以降>

2 月 19 日	平成 23 年度第 4 回常任理事会（聖心女子大学）
3 月 4 日	平成 23 年度第 4 回編集委員会（立教大学）
3 月 27 日	『音楽教育実践ジャーナル』vol.9 no.2, ニュースレター 第 47 号発送
3 月 31 日	平成 23 年度会計決算
4 月 30 日	平成 23 年度会計監査会（事務局）
5 月 13 日	平成 24 年度第 1 回編集委員会（立教大学）平成 24 年度第 1 回常任理事会・理事会（立教大学）

【審議事項】

1 第 43 回大会について

(1) 大会実行委員会から

大会運営計画，現時点での企画立案状況等について説明があった。

(2) 企画担当理事から

寺田常任理事からプロジェクト研究について説明があり，新規に立ち上がる「音楽教育学における『記録』」の内容について説明があった。本プロジェクトにおいては，パネラーを公募してはどうかという意見が出された。これに対し，タイムスケジュール上，今年の公募は難しいが，2 年目となる来年度は公募を行うよう検討することが決まった。また，今年度が 2 年度目となる「倫理」プロジェクトでは，著作権問題を扱うことが報告された。

(3) 大会参加費について

正会員の事前予約者は 4000 円，正会員の当日参加者は 4500 円とすることが承認された。

(4) 大会覚え書きについて

大会覚え書きについて，「2. 大会の会計」の諸項目を慎重に検討した。その結果，「2.4」の項目については以下の修正をおこなうこととした。

現行

大会プログラムに掲載される賛助会員の広告料は学会本部，非会員の広告料は大会実行委員会に支払われる。

修正

大会プログラムに掲載される広告のうち，賛助会員以外の広告料は大会実行委員会に支払われる。

(5) 事務局から

研究発表募集状況：現在のところ，まだ発表申込はなし。

研究資料保存について：現在保存している資料について，破棄する方向で理事会で審議することとなった。

(6) 院生フォーラムについて

東京音楽大学非常勤講師の中村千鶴さんと同 M1 の野田かおるさんを担当者として，計画が

進行中であることが報告された。

(7) 総務から

水戸常任理事から、イベント保険の加入についての提案があった。審議の結果、大会実行委員会にイベント保険への加入を理事会から推奨することが決定された。

2 日韓ワークショップについて

水戸実行委員長より、現在の進捗状況が説明された。

3 来年度ゼミナールについて

加藤会長より、「社会に発信する」ことのできるような内容にしたいとの説明があった。また、佐野常任理事を中心に進めることが提案され、承認された。その他の実行委員メンバーについては、ゼミナールの内容と併せて理事会で検討することとなった。

4 倫理綱領作成委員会設置について

加藤会長より委員会のメンバー案が示され、承認した。

5 支援ポータルからの提案について

加藤会長より、支援ポータルの有効な活用を目指す担当者からの提案が説明された。審議の結果、(1) 支援内容の案内を会員のみではなく、広く学校や教育委員会等にもおこなう、(2) 財源を運営メンバーの持ち寄りとするのはおかしいので、学会として確保する（新しく会計項目を立てるのではなく、学会基金から支出する）の2点を理事会で審議することとなった。

6 その他

加藤会長より将来構想WGを立ち上げることが提案され、承認された。担当は総務担当理事。今川事務局長より、発送方法の変更に伴う個人情報の扱いについて説明があった。

* 次回常任理事会 平成24年7月中旬の予定。場所未定。

3-2 平成24年度第1回理事会報告

日時：平成24年5月13日（日）14:30～17:00

場所：立教大学 12号館第一会議室

出席者：加藤、有本、今川、伊野、今田、小川、奥、北山、阪井（記録）、島崎、嶋田、菅、寺田、福井、本多、安田、山本、吉富

加藤会長の挨拶に続き、今川事務局長から前年度第3回理事会以降の会務報告がおこなわれた。

▶ 12頁参照

【審議事項】

1 平成23年度決算報告及び監査報告

会計担当理事より決算報告及び、会計監事（田中）より監査報告があった。

2 平成24年度事業計画及び補正予算について

担当理事より説明があり、承認した。

3 平成25年度事業計画及び予算について

担当理事より説明があり、承認した。

4 第43回大会について（平成24年10月7日～8日、東京音楽大学）

- ・ 大会実行委員会から、大会運営計画と現時点での企画立案状況等について説明があった。
- ・ 大会覚え書きの文言が、一部修正された（大会プログラムに掲載される広告については「広告料」という表現を使用しない）。
- ・ 企画担当理事からプロジェクト研究について説明があり、承認した。2年度目となる「倫理プロジェクト」では、今年は著作権問題を扱う。新規に「音楽教育学における『記録』

が立ち上がる。

- ・事務局から、大会における発表資料保存の廃止について提案があり、現在までの保存資料処理（廃棄）については総会に諮ることを承認した。今後は1年間の保存とすることで合意した。
- ・その他、院生フォーラムの準備状況について報告があった。
- ・総務担当理事から「イベント保険」加入を推奨する旨の説明があり、大会実行委員会に伝えることとなった。

5 第44回大会（東北地区）について

平成25年10月、弘前大学で開催することを確認した。弘前大学の学会託児支援事業活用について合意した。

6 日韓合同ワークショップ（平成24年8月25日～26日、明治学院大学）について

水戸実行委員長より、準備状況が報告された。

7 来年度ゼミナールについて

加藤会長より、学会から「社会に発信する」というコンセプトについて説明があった。佐野理事を中心に進められる。

8 倫理綱領作成委員会設置について

会則第3章・第18条に基づき、加藤会長より倫理綱領作成委員会の設置と委員会のメンバー案（以下）が示され、承認した。

加藤富美子・遠山文吉・権藤敦子・西島央・今川恭子・志水宏吉（外部委員）

9 編集委員会規定と投稿規定について

本多理事（編集委員）より説明のあった、編集委員会規定（II2.イ）の軽微な修正は総会の議題とする。投稿規定（II3.）の修正は引き続き編集委員会で検討する必要性を指摘した。

10 英国の音楽教育心理学会（SEMPRE）との交流について

今田理事よりSEMPREからの交流要請について説明があり、引き続き理事会メールで検討することにした。

11 支援ポータルからの提案について

加藤会長より支援ポータルの有効な活用を目指す担当者からの提案が説明され、今後活動を広く広報すること、学会の社会活動費として資金を学会基金から支出することを承認した。

12 参事について

加藤会長より学会参事4名（塚原健太・木下和彦・松本哲平・渡邊拓：全員総務担当）について引き続き業務を依頼する旨の説明があり、承認した。

13 名誉会員について

名誉会員資格について、次回検討することになった。

14 新入会員および退会者について

今川事務局長から資料の提示があり、新入会員32名、申し出退会39名、その他の報告があり、承認した。 ▶ 15頁に掲載。

15 その他

- ・加藤会長より、総務担当の北山理事・水戸理事を中心とする学会の将来構想WGを立ち上げる旨の説明があり、承認した。
- ・今川事務局長より、8月発行の「音楽教育実践ジャーナル」と大会プログラム及び大会関係書類、ニュースレターの発送を外注するため、業者に名簿ファイルを託す旨の説明があり、承認した。

【報告事項】

1 各委員会報告

編集委員会より、特に「書評」をめぐるシステムについて検討中であることが報告された。

2 地区例会報告

各地区担当理事より、23年度後半期の地区例会や24年度の計画が報告された。

3 ニュースレターについて

ニュースレター48号について小川担当理事より、原稿は1枚以内、5月31日必着で提出するよう要請があった。

4 事務局からのお知らせ

事務局の開室時間等は、HP上で確認できることが報告された。

*平成24年度第2回理事会 10月6日（土）東京音楽大学、時間は未定。

新入会員（平成24年2月19日理事会以降）：32名

申し出退会者：39名

【5月13日現在 正会員数：1490名 学生会員数：2名】

3-3 平成 24 年度 役員及び委員一覧

	氏名 (所属)	選出地区	担当
会 長	加藤 富美子 (東京学芸大学)		
副 会 長	有本 真紀 (立教大学)	関東	
事務局長	今川 恭子 (聖心女子大学)	関東	
常任理事	伊野 義博 (新潟大学)	◎北陸	企画
	今田 匡彦 (弘前大学)	◎東北	国際交流
	小川 容子 (岡山大学)	中国・四国	広報
	奥 忍 (近大姫路大学)	近畿	会計
	北山 敦康 (静岡大学)	東海	総務
	佐野 靖 (東京芸術大学)	関東	編集
	島崎 篤子 (文教大学)	関東	会計
	寺田 貴雄 (北海道教育大学)	◎北海道	企画
理 事	水戸 博道 (明治学院大学)	関東	総務
	阪井 恵 (明星大学)	関東	
	本多佐保美 (千葉大学)	関東	編集
	山本 幸正 (国立音楽大学)	◎関東	
	南 曜子 (金城学院大学)	◎東海	
	嶋田 由美 (和歌山大学)	◎近畿	
	安田 寛 (奈良教育大学)	近畿	
	吉富 功修	◎中国・四国	
会計監事	菅 裕 (宮崎大学)	◎九州	国際交流
	福井 昭史 (長崎大学)	九州	
	杉江 淑子 (滋賀大学) 伊藤誠 (埼玉大学)		

◎ は地区担当理事

編集委員会	委員長：尾見 敦子 副委員長：荒川 恵子 伊野 義博 岡部 芳広 小中 慶子 塩原 麻里 藤井 浩基 永岡 都 中地 雅之 深見 友紀子 佐野 靖 本多 佐保美
国際交流委員会	委員長：今田匡彦 菅 裕 疇地 希美 磯田 三津子 柴崎 かがり
学会賞審査委員会	加藤 富美子 村尾 忠廣 坪能 由紀子 尾見 敦子 八木 正一 佐野 靖 伊野 義博
選挙管理委員会	中嶋 俊夫 宮本 憲二 鈴木 慎一朗 村上 康子 寺田 己保子
広報委員会	委員長：小川 容子 志民 一成 齊藤 忠彦 大沼 覚子
倫理綱領作成委員会	加藤 富美子 志水 宏吉 (外部委員) 遠山 文吉 今川 恭子 権藤 敦子 西島 央
音楽文献目録委員会	木間 英子 山原 麻紀子 長野 麻子
参 事	塚原 健太 木下 和彦 松本 哲平 渡邊 拓

3-4 編集委員会からご挨拶と報告

編集委員会委員長 尾見 敦子

ご挨拶

2010-2011年度の2年間は、さまざまな改革が実を結びました。村尾前委員長がニューズレターの前号で総括しているとおりです。

改革の第一は、会員の権利である投稿に関して、明文化・明瞭化・至便化が図られたことです。研究の成果発表、学会誌にふさわしい自由な意見表明がしやすい枠組みを整えるために、規定の見直しと改正が行われました。

前委員長のもとで発行された最後の『音楽教育学』（第41巻 第2号）から、巻末の「投稿規定」が新しいものになりました。『音楽教育学』への投稿の種類に新たに「論考」が加わり、「研究論文」と「研究報告」とは別種のものとして明確に区別されています。一方、『音楽教育実践ジャーナル』の巻末の「投稿規定」が新しいものになったのは、2011年3月末発行のvol.8 no. 2でした。そこには「論文」が査読付であることが明記されています。

「論文」が明確になったことで、ジャーナルに様々な種類の自由投稿が増えていくことを願っています。また、大会の口頭発表を経て、2誌のどちらかに、投稿の種類を選んで投稿する、というスタイルを歓迎いたします。投稿の「至便化」に関して、すべてのテンプレートの再整備が、委員会内のワーキンググループによって完了しております。こうして、2012年度は、学会誌が種々の投稿で彩られていく、新しいステージの始まりとなります。

さて、改革の第二は、学会誌の内容の充実を図ったことです。その取り組みの一つは、「質を落とすことなく、掲載率を高める」こと、もう一つは4年前から始まった「企画する編集委員会」の路線継承でした。「質を落とすことなく、掲載率を高める」という前委員長の方針にしたがって、各担当委員は、査読者からの「修正のための有益なサジェスション」を執筆者にきちんと伝えることはもとより、掲載にこぎつけるまでの、修正のための著者とのやりとりを丁寧に行っていました。この路線に変更はありません。「企画する編集委員会」のスタイルは定着し、『音楽教育学』における「研究動向」や「書評」、『音楽教育実践ジャーナル』の特集の企画に、今期も委員一同、知恵を出し合って参ります。

今期の重要な課題は、「編集委員の負担の軽減」を図り、「持続可能な編集委員会」とすることです。投稿された論考の書式が「投稿の手引き」にかなっているかどうかのチェックを、これまで担当編集委員が夜を徹して、目を真っ赤にして行ってきました（と言っても過言ではありません）。この作業を、今年度から専門家に委託することになりました。しかしながら、会員の皆様には、引き続き、投稿の際は、「投稿の手引き」を参照してくださるよう、お願いいたします。今期は、以上の基本路線を継承しつつ、あらゆる方向から「編集委員の負担の軽減」を図っていくつもりです。

学会誌は学会のいわば「顔」です。『音楽教育学』と『音楽教育実践ジャーナル』の2誌は、性格を異にしつつも、車の両輪のごとく、双方、相合わさって、本学会が音楽教育の理論と実践に関する包括的な学会であることを示しています。年間4冊の誌面の内容は、学会活動のパロメーターであり、会員の自発的な研究活動の交流の証しです。

学会誌は皆様とともにあります。よりよい学会誌の編集をめざして2年間、精一杯努めて参りますので、どうぞよろしく願いいたします。

第1回編集委員会報告

加藤会長から2012-2013年度の編集委員12名が委嘱され、今年度の第1回編集委員会が5月13日に立教大学で開催されました。冒頭で人事案件が話し合われ、委員長に尾見敦子委員、副委員長に荒川恵子委員が選出されました。

1. 『音楽教育学』（第42巻 第1号）について

今号は、研究論文が1本、研究動向、書評が2本、例会報告という構成です。「研究動向」のテーマは昨年に引き続き、「多文化共生社会に果たす音楽教育の役割」です。昨年はその前編として、結城恵氏（群馬大学、非会員）に日本の「多文化共生教育」の研究動向を概観していただきました。今号はそれを受け、内外の音楽教育研究者による3本の依頼原稿が掲

載されます。その一つは、アメリカの多文化共生の音楽教育に関して著名な研究・実践家の一人である、パトリシア・シェハン・キャンベル氏によるもの（共著）です。今田匡彦会員（常任理事、3月まで編集委員）のご尽力によって実現しました（翻訳も今田氏）。このように充実した内容で、6月末に皆様のお手元に届きます。

2. 『音楽教育実践ジャーナル』について

『『評価』再考—測ってきた音楽，測ってこなかった音楽』を特集テーマとする、ジャーナル vol.10 no.1 は、この報告を書いている今、編集作業の真っ只中です。投稿いただいた中から4つの論考（論文2本，報告2本）が掲載されます。前号「音楽授業に果たす教科書の役割」に引き続き、今号も学校音楽教育の中心課題に迫ります。こちらは8月末に皆様のお手元に届きます。そして、来年3月末に発行予定の、ジャーナル vol.10 no.2 の特集テーマは「音楽教育におけるアウトリーチを考える」です。会員の皆様からの特集投稿，及び自由投稿をお待ちしています（9月15日締切）。

上述した，さまざまな運営上の問題や，よりよい誌面作りに向けての議論を，第2回以降の編集委員会で行っていきます。それらについては，適宜，この誌面で報告いたします。

3-5 国際交流委員会からご案内

国際交流委員会委員長 今田 匡彦

30th ISME World Conference on Music Education が，7月15日から20日にかけて，ギリシアのテッサロニキにて開催されます。詳細は以下のサイトにてご確認ください。

また大会前には，各コミッションの開催が予定されており，オブザーバー参加が可能となっています。各コミッションの Website をご参照下さい。



エーゲ海から見た Thessaloniki Concert Hall

ISME のホームページは，こちらをご覧ください 📄

http://www.isme.org/index.php?option=com_content&view=category&layout=blog&id=43&Itemid=26

3-6 常任理事会企画からのお願い

第2次倫理ワーキンググループ

プロジェクト研究1 音楽教育研究におけるルールとは (2)

—著作権を中心とした学習会—

♪ アンケートにご協力ください ♪

第2次倫理ワーキンググループ（座長 山本文茂）では，ニュースレターNo.47でご報告いたしましたように，会長からの諮問に対して，本学会における倫理の問題にどのように取り組んでいくべきか，2月に答申を行いました。その後，常任理事会での審議を経て，本学会

における倫理綱領の策定が重要な課題として位置づけられました。

倫理の問題については、会員の意識を高めるとともに、広く社会に対して学会の姿勢を示していくことが求められています。倫理綱領以前に、まず、会員相互でこの問題について対話を行い、認識を深めていくことが必要です。そこで、2年にわたる常任理事会企画のプロジェクト研究として、「音楽教育研究におけるルールとは」というテーマの下で、学会大会時に学習会をもつことになりました。

1年目の昨年度は、「個人情報保護を中心とした学習会」を行い、研究の自由を確保する一方で、研究にあたってどういう点でどのような倫理的配慮が必要なのかを徳本広孝氏のお話（研究の自由と情報の自己決定権）から学びながら、意見交換を行いました。

今年度は、昨年度に続く2年目として「著作権を中心とした学習会」を企画しています。この問題を取り上げるにあたって、具体的な状況にどのように対応すればよいのかも知りたい、という声が複数挙がっておりましたので、このたびの学習会に向けて、会員の皆様からアンケートをお寄せいただくことになりました。いただいたアンケートの結果に基づいて、基本的な内容を確認する講演とQ & A、フロアとの自由な質疑応答を中心に計画しています。

今年度のご講演をお願いした山神清和氏は、首都大学東京大学院社会科学研究所法政治学専攻教授で、知的財産法をご専門とされていますが、ファイル共有サービスによる音楽著作権の侵害など、近時の情報技術の発展に伴って生じた問題について研究をされています。大会までに、同封しておりますアンケートの回収結果も一緒にご検討いただいて、会員の皆様の知りたいこと、疑問に思っておられることに沿いながら、日本音楽教育学会の会員とかかわりの深い著作権の問題をわかりやすくお話しいただく予定です。お互いの理解を深めるよい機会になると思いますので、アンケートへのご協力とプロジェクト研究へのご参加をどうぞよろしくお願いいたします。同封のB5用紙のアンケートにご記入いただき、同封の返信用封筒（切手不要）に入れてご投函ください。

お忙しいところ恐縮ですが、8月6日（月）までに よろしく願いいたします。



（今川 恭子・西島 央・権藤 敦子）

4 事務局からのお知らせ

事務局長 今川 恭子

- 第43回大会研究発表の申込を締め切りました。多数のお申込を有難うございました。
- 新しい入会申込ならびに会員情報管理システムのスタートに伴い、会員の皆様には正確なメールアドレスの登録をお願いしております。まだ登録なさっていない方は事務局までE-mailでご連絡ください。
- 事務局へのお電話でのお問い合わせは、開局時間内をお願いいたします。FAXやE-mailは、開局時間内・外を問わずご利用いただけますので、ご活用ください。
- 2012年3月19日から新しい会員情報管理システムが稼働しています。新会員データベースはNPO法人「情報ネットワーク教育活用研究協議会」(<http://jnk4.org/jnk4home/>)のサーバ上で管理されています。皆様の大切な個人情報を安全にお預かりするとともに、よりスムーズな学会運営と研究交流の活性化に貢献できるよう努力していきたく思います。新システムでは、web上で入会申し込みをすると自動返信メールが届きます。また、年度会費納入の確認作業を事務局で行なうと、会員のお手元に確認メールが自動送

信されます。メールアドレスが未登録の方、アドレス登録済みで会費納入したのに確認メールが来ないという方は、事務局にご一報くださるようお願いいたします。なお、事務局開局時間の関係や業務の多寡によって、会費納入後確認メール送信まで2週間程度要することもありますのでご了承ください。

◆ 事務局開局時間

月・水・金 9:00~15:00

時間外のご用件は E-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp) へ

◆ 事務局スタッフの異動

亀山さやか・長山弘 (2012年3月より)・坂本友里 (2012年4月より)・
大平奈緒 (2012年6月より)

新しいスタッフが増えました。どうぞよろしく申し上げます。

..... 【編集後記】

「〈会員の声〉ページを充実してください」という嬉しいご要望が届きました。ニューズレター偶数号は、理事会・諸委員会からのお知らせや報告がどうしても多くなってしまうので、これまで、会員の皆様からの情報は奇数号で発信しようと位置づけてきました。でも、「早くお伝えしたいこと」は、やっぱり「早くお届けしよう!」という事で、毎号、掲載することになりました。本号にも鮮度の高い情報がたくさん掲載されております。広報委員一同、これからも臨機応変に対応していきますので、どうぞよろしくお願いいたします。 小川容子・大沼覚子 記

平成 24 年度 日本音楽教育学会役員

会長：加藤富美子

副会長：有本真紀

常任理事：今川恭子 (事務局長), 伊野義博 (企画)・今田匡彦 (国際交流)・
小川容子 (広報), 奥忍 (会計)・北山敦康 (総務)・佐野靖 (編集)
島崎篤子 (会計), 寺田貴雄 (企画), 水戸博道 (総務)

理事：阪井恵・本多佐保美・山本幸正 (関東), 南曜子 (東海), 嶋田由美・
安田寛 (近畿), 吉富功修 (中国・四国), 菅裕・福井昭史 (九州)

会計監事：伊藤誠・杉江淑子

参事：塚原健太・木下和彦・松本哲平・渡邊拓

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX：042-381-3562 E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ